

美紗の会

たより

新たな己の道へ

西松 布咏

名取式を間近に控えた五月十日花柳千壽文師に導かれご遷座四百年祭で賑わう神田明神へ参拝に行った。境内は各町内の神輿と人々で溢れ、立錐の余地もなくほんの片隅で「江戸の粋」を垣間観ただけだったが、今日の日曜日は明神様が美紗の会の為に祈って下さる...と思うと誇らしいような嬉しさがこみ上げてきた。思えば数年前にこのお祭りで清水権宮司様とご縁が繋がりがり明神会館で「江戸唄と落語の会」を開かせていただき、来る十七日は二度目の美紗の会の名取式を迎えさせていただくことになっている。縁の糸と言えば去る二月梅の花が色づき始めた上野公園に佇む「梅川亭」のロケ撮影に立ち会ったことがあった。二年前の映画「天心」で役者に挿入唄の指導をしたことがきっかけで今度はテレビドラマ「赤めだか」で落語家を演じる役者に唄の指導を依頼されたのである。立川談志とその一門の物語は、その日ビートたけし演じる談志が弟子の二ツ目昇進の試験で「嘶家たるもの小唄や都々逸ぐらいやってみい！」と発破をかける場面であった。

役者の濱田岳・宮川大介さんは深夜のたった一度の稽古と、片時も離さぬテープで本番に臨んだので気の毒な程、必死の形相であったが、私も談志師匠とは浅からぬ縁があったので師匠の顔を潰さぬように何としてでも形にしなければ！と我が子の面接試

験に付き添う母親のような心境で必死に口移しを繰り返した。談志師匠とのご縁は今から十数年前になる。長年来的友人である新潟岩室温泉のイベント仕掛人・和田義昭氏が毎年主催する「談志・田んぼ祭り」に出かけたり、陶芸家の米沢隆一氏の銀座の個展の折にパンダナと短パン姿で自転車で駆けつけた師匠にばったり出会い、私が「目下、富本を修行しています」と話しかけたら「ずいぶん珍しい唄に取り組んでいるねえ！」といたくほめられた。その道の専門家でも知らない富本をご存知とは...とべらんめえのしゃがれ声でひとしきり喋って下さったあの日が鮮やかに蘇る。二年前の新潟角田浜での「アジール公演」後に泊まった岩室温泉宿の「松屋」では師匠お気に入りの部屋に滞在し「寝そびれて呆れ返っ



た鴉かな」の達筆な掛け軸を枕元に今は亡き師匠を偲んで眠ったものだった。縁の糸は様々に過ぎし日々をたぐり寄せてくれる。

ふと、現実に戻ると笑みを浮かべていたたけし師匠に談志の魂が乗り移ったかのように、みるみる熱気を帯びて来た。かるうじて合格し抱き合って喜ぶ弟子に向かつて「立川流は他の流派とは違うんだという誇りを持って！落語愛好家だけに好かれるような嘶家にはなるな。落語は人間の業の肯定だ。思うように生きられない人間模様を描け。伝統の踏襲だけでなく己を見つめ人生がにじむような芸を目指してゆけ！」と台本にはない言葉がポンポンと出てくるので必死でメモをしたものだった。明治の思想家岡倉天心も弟子に対して厳しかったという。「完全なものばかりを求めるな。不完全な中に身を置き常にもがき苦しめ」と...そして弟子の横山大観や菱田春草はやがて見えなかったものが浮き上がってくるような「朦朧体」の画風へとたどり着いたのだ。私などはとても及びもつかぬ果てしなく続く芸道への執着だがその精神だけはいまだに持ち続けているつもりである。

一週間後には神田明神の御前で宮司様の厳かな祝詞と共に五名の新名取が誕生する。美紗の会の名取苗字「己紗」は己である。己は胎児であり、植物が自然の土から養分を得て実を結び種子となるように新しい誕生を意味する。

師匠として芸の道を共に歩んでゆく旅立ちの名前を授ける喜びは一入であるが「己達つせんと欲すれば人を達せしむ」と論語にあるように我が身の己をますます謙虚に見つめ、糸と唄との微妙な間合いを研鑽するだけではなく絶えず人との間を大切に保ちながら一歩ずつ共に精進して行けるような美紗の会でありたいと念じながら、その日に望みたいと思う。

初めより

斎藤 譲一

初めまして、新人の斎藤譲一です。先日的美紗の会で初デビューさせて頂いたとき、またまさかのこの「たより」にまで載せていただけたとは光栄の至りです。さて何を書こうかと、読まれる方が一番知りたいのは「何故小唄と三味線の世界に入ったのか？」ではないでしょうか？現代の生活からこの世界に入るには何か特別なきっかけがない限りなかなか近づき難い世界ですね、江戸時代ならヒットパレードの最先端だったのにと。ふっと思っただのは、先日の師匠のしごき？は気迫に満ちていました、「初めより」の三味線の稽古で何とかメロディになってきたので、歌詞と間を組み合わせ始め、途中からやり直しが入るのですが、まだ最初から最後まで流れでしか覚えておらず、途中からのやり直しではパニックになりながら必死で奏でたこと、終わった時は右手首が痺れて、終わったときの開放感、あくあ気持ち良かったこと、この年、還暦過ぎまで生きてきますと必死になることは滅多にありません、岩登りしていて落ちそうになった時くらいで、長年人生の苦が生えてきているので、それなりに何でも無難にこなすことができるので、こんなに短時間に必死に何かをすることはなくなっていたので、終わった後の開放感、脱力感の気持ちのよさは格別でした、師匠厳しいご指導ありがとうございました。

そもそのきつかけは銀座ギャラリー一穂堂さんの辻村史朗さんの壺から茶碗、傳田京子師匠からの紹介、気学で自分の特性を知り三碧木星の星の元に生れたことで声を出すことが得意なことを知ったこと、学生時代市丸姐さんの小唄が好きだったこと、



小さい頃映画やテレビなどで若旦那が鼻歌交じりに小唄を口ずさんでいる情景に憧れていたなどが始めるきっかけになったようですね、こうやって整理してみるとだんだん自分の頭の中が整理されてきました、読まれる方からしますと思考があっちこちに飛んで支離滅裂な様に感じられるかもしれませんが、その通りです、理性で書いているのではなく、頭に浮かぶイメージをそのまま文章にしているだけなので主語述語、起承転結などおかまいなしに、筆が流れるまま書き記しているとご理解いただきお許しください。

さて具体的なきつかけは大学二年の時、隣のアパートの二階のお姐さんの部屋から週末になると聞こえ

てきた市丸姐さんのLP(当時はレコードでした)が心地よく、自分でもLPを購入し、あの当時のテープレコーダーは高価で下宿している学生では買えない代物だったため、中古のオープンリールのレコーダーを拾ってきて夜な夜な繰り返し聞いていたのがきっかけです。あれから四十年、どこかで聞いたフレーズですが、小生のお茶の師匠であります傳田京子師匠から赤坂クラブで江戸小唄の会があるとメールが入り、試しに参加してみたところ、布詠師匠の障子の裏側から鶯が鳴いているような美声にクラクラとなり、会の門を叩いた次第です。入門前に傳田京子師匠にお話したら、それじゃ使っていないお三味線を譲ってくださいと、とんとん拍子で話が進み、何がどうなるかなど全く分からずに三味線をかかえて今年一月に入門させて頂いた次第です。

何が楽しくて？先に書きましたように、最初「初めより」の小唄もお三味線も必死の一言、一時間の稽古中全く雑念も入らず手に汗握る大スペクタクル、「必死」の一言でとても新鮮な、生きているという実感を味わい、終わった時の開放感もまた快感？もう一つ、師匠から厳しい？稽古(師匠の稽古は真剣勝負で緊張感があります、個人に合わせて如何に成長して欲しいと願いが現われていますね、ありがとうございます)をつけていただいている時に、小唄というものに全く違和感がなく、むしろ懐かしく感じたことです。もし前世というものがあるとすれば江戸時代の若旦那だったのかもしれないね？という、とりとめもないお話で切り上げさせていただきます。

お稽古も先日の発表会も大変楽しい時を過ごさせて頂いておられます。ありがたいことです。今後とも皆様のご指導の程、宜しくお願い申し上げます。ありがとうございます。合掌！

布詠師匠 MEETS 初音ミク

今宮 陽子

『第1回世界ボーカロイド大会』が二月二十一日～二十二日、静岡県掛川にある『ヤマハリゾートつま恋』で開催され、大会二日目には、美紗の会の福岡俊弘さんがプロデュースするステージイベント『間と舞ー邦楽 MEETS VOCALOID』がメインステージである『ガーデンスタジオ』で行なわれました。

初音ミクマガジン『MIKU-Pack』の総編集長も務めた福岡さんは、ボーカロイドの日本の伝統芸能への適用に深い関心を抱いていて二〇一三年の前回大会では文楽人形とボーカロイドのカップリングを行っていました。そして今回は、三味線音楽とボーカロイドキャラクターの3Dモデルの紐づけをテーマとして、布詠師匠と初音ミクとの共演をプロデュースされました。

さて注目のステージは、布詠師匠が初音ミクに合わせたという素敵な青地の帯で登場。上方唄『いざや』の演奏が始まります。するとなんとスクリーンに投影された初音ミクが唄・三味線に合わせて舞うではありませんか！初音ミクの動きは、手の絶妙な角度、優雅な動作の中にもふいに機敏さがみえる無駄のない所作、3Dコンピュータグラフィックスならではの世界観の内に、舞の幽玄な美しさが表現されているように感じました。この初音ミクの動きは、千寿文先生の舞を参考としてコンピュータグラフィックスで作られたそうです。

二曲目からは師匠の独奏で、小唄『春風がそよそよ』、『山谷の小舟』、端唄『宇治茶』、『富士の裾野』、『櫓お七』が演奏され、会場は伝統的な邦楽の世界



に魅了されてゆきました。

最後の曲は今回のステージの目玉である『千本桜』。大正時代の世界観を背景としたボーカロイド曲を師匠はどのように演奏されるのでしょうか。師匠は、まずサビパート「千本桜 夜にまぎれ 君の声も聞こえないよ」を三味線なしで情感たっぷりに唄いあげました。ボーカロイド曲である『千本桜』が、古くから日本にあった伝統的な曲のように聴こえて

きました。

邦楽的でありながらリズムミックスにアレンジされた三味線と唄に、いつしか客席から手拍子がわき起こり大きな渦となつて会場の空気はダイナミックに揺れます。師匠も「この手拍子がとても気持ちよく、唄いやすかった」と仰ったように、ステージと観客、三味線音楽とボーカロイドとが一体化した時空となりました。

そしてふたたび「千本桜 夜にまぎれ 君が唄い僕が踊る」と余情溢れるエンディング。闇夜に舞う千本桜が目に見えませんでした。

邦楽でもっとも重要とされるのは「間」。それは音の間合いのことでもあるし、相手との関係性の間、空気の間でもあります。セッション『間と舞ー邦楽 MEETS VOCALOID』は、布詠師匠と初音ミク、ボーカロイド、観客が遭遇し、それらの「間」が共鳴しあつて新たな文化が芽吹いたように感じました。

「無音」と「静止」

高橋 幸治

さすがに八年も師匠のもとで稽古を積んでいると（あまり積めていないかもしれないが）、自分の「悪い癖」がわかってくる。師匠からみれば本当はもっとたくさんあるのかもしれないが、自分で自覚している最も「悪い癖」は「唄の語尾がだらしく延びる」ということである。「どうだ？ どうだ？ ぼちぼち切り上げ時か？」などと迷っているうちに語尾がどんどん延びていく。綺麗にピタッと止められない。結果、次の節にタイミングよく飛び込めない。おそらく、唄だけでなく三味線の音も同じことになっているのだろう。

このところ、この「止めるべきところでキチンと止める」ということが課題だなあと思っている。

つまり、いかに無音の状態を作るかということである。音楽は言うまでもなく「音」の芸術だから、いかに美しい音を奏でるかが重要なんだけど、楽譜に音をびっしり敷き詰めていく洋楽とは異なり、邦楽、特に三味線音楽は音を削いで削いで、最小限の音で構成される音楽なので、休符＝無音の状態にとっても大きな意味があるのだろうと感じる。

精神病理学者の木村敏氏は「あいだ」(ちくま学芸文庫)という本の中でこんなことを言っている。「演奏の行為において生み出されるのは音だけではなく、音と音のあいだをつなぐ区切り(休止)もそれに含まれる」、さらに、「音と音のあいだの音ない空白、これを普通は『間』と呼ぶのだが、生きた音楽においてはこれは決して単なる沈黙ではない」……と。やはり、邦楽においてはこの「無音」の存在が重要であるに違いない。

四月二十九日(水)、国立劇場大劇場で行われた「錦会」で花柳千寿文先生の舞を拝見させていただいたときにも同じことを考えた。今回、唄と三味線は我が西松布詠師匠である。花柳錦吾師と師匠の「丹頂の鶴」の後、舞台は暗転。広い劇場を支配する沈黙と暗闇……。そして舞台上に再び照明が当たると、黒い着物に身を包んだ千寿文先生がまるで夢の中に浮き出るように現れた。このときすでに千寿文先生の「静止」している姿が美しい。千寿文先生の体はまだ動作を開始してはいないが、舞はもう始まっているのだなあと考えた。邦楽と同様、舞踊もやはり「止まること」「止めること」が芸の真髄なのではないだろうか？

地唄「黒髪」は十分近い大曲であり、千寿文先生の舞もさまざまな所作の連続によって女性の哀しい

心情が表現されていく。おそらく入門したての頃の自分であれば、その流麗な美しい動きにだけ目を奪われていたように思う。しかし、最近、稽古を通じて「無音」への関心が高まっていただけに、千寿文先生の舞踊も所作と所作の間の「静止」を興味深く拝見した。直前の動作がピタッと止まり、完全な「静止」を経て、次の動作へと移っていく……。流れるべきところは流れ、止まるべきところは止まる。前述した木村敏氏の説を借りれば、動いている時だけが舞ではなく、そこには多分に「静止」の美が含まれているような気がした。



《今後の予定》

◎七月十一日(土) 十一時半より

紀尾井町 福田家

美と味の調和 四季の日本料理と芸能
夏の料理と江戸唄 西松 布詠

◎八月九日(日) 三時より

岐阜 かわらや大広間

第十六回 粋艶会のおどい
一門の演奏会と親睦の宴

◎八月二十三日(日) 三時より

軽井沢 鶴間邸

第七回 薊の会

◎十一月二十九日(日) 十二時より

東京プリンスホテル プロビデンスホール

第五十回 美紗の会のつどい

第五十回記念演奏会と祝賀パーティ



■たより第80号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三ー二ー二

白金台プレイス三階

電話 (二四四一) 二七二六

(五四四七) 二四二二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www17.ocn.ne.jp/~misas>

